「現在地を知る」

今年の彼岸会法座で、ご講師の小林顕英先生が次の様なお話をされました。
あるお寺の法座に招かれた時のことです。

初めて訪問するお寺でしたので、事前に案内地図をもらって、ご自分の車で出かけられたのです。ところが、案内地図どおりに走っているつもりなのですが、一向に目的地のお寺にたどり着けないのです。

「おかしいな。どうしたものか」と途方にくれた先生は、近くにあった公衆電話から、お寺に電話をしたのです。
「地図に書かれてある通り、運転しているのですが、中々そちらへ着かないんです。どうしたんでしょうか？」

電話に出た住職さんは、
「今、どのあたりにいますか？」と、問われたのです。
そこで先生は周りの目に付くものを色々と説明したところ、
「分かりました。先生は今、どこそこのところにいます。ですから・・・」と、言って、そこからお寺までの道順を説明されたのです。

住職さんは、迷っておられる先生の現在地をまず聞かれたのです。
それによって先生は、「あーそうか、自分は今ここにいるのか」と、自分の現在地が分かりました。
現在地が分かれば「それならこう行けばいいのだな」と、目的地のお寺までの道順を把握することが出来たのです。

先生はこの体験を通して、
「目的地が地図に示されていても、自分の現在地が分からなければ、目的地には行けないんだということがよく分かりました。私たちの人生は、よく旅に例えられますが、人生が旅であるならば、出発点とゴールがあるはずです。もし自分の現在地が分からなければ、無事ゴールにはたどり着けません。そのような状態を仏教で『迷い』というのだと思います」とおっしゃられたのです。

このお話を伺って、「なるほどなー、現在地を知るということは本当に大事なことだ」と改めて思ったことでした。
果たして、人生の旅を続ける私たちの現在地はどこでしょうか？そして、目指すゴールはどこでしょうか？
親鸞聖人は、ご自分の現在地を、
『地獄は一定すみかぞかし』（歎異抄）とおっしゃっています。すなわち、「現在地は地獄だ」と言われるのです。

ここで言う地獄とは死後の世界のことではなく、「自分は正しい、間違っておらん」という「我執」を軸に、他を裁くことしかしない心の有り様のことを言っているのです。或いはそういった日暮らしのことを言うのです。

まさに迷いの真っ只中にいるとおっしゃるのです。
まことに厳しい自己分析です。
親鸞聖人は、どうしてご自分が迷いの中にいると言うことが分かったのでしょうか。
そもそも、迷っている者は「自分は迷っている」などと気づきません。また、そんなことを思いもしません。
そうしますと、それに気づくためには、どうしても、「迷っていない側」からの働きかけが必要になります。
その働きかけをして下さったお方が阿弥陀さまなのです。

阿弥陀さまは、迷っていながら迷っていることに気づかない、そんな愚かな日暮らしを続けている私に向かって、「あなたは迷っていますよ。だからこそ、救わずにはおれないんですよ」と、働きかけて下さるのです。

そのお心（大悲心）を、疑いなく頂く時、「私は迷っている」と知るのです。
それはまた、阿弥陀さまに救われたということも意味するのです。

このように、迷っていない側（阿弥陀さま）からの働きかけによって、私の現在地が迷いの世界である（「私は迷っている」）ということと、目指すゴールが阿弥陀さまの浄土であり、そこに間違いなくたどり着ける（「阿弥陀さまに救われた」）ということを同時に知ることが出来るのです。

これは自分の意志や力で知ったのではなく、まったく阿弥陀さまの一方的な働きかけによるものですから、これを他力信心と言うのです。

この信心を頂くことは、人生という旅を続ける私たちにとって、計り知れない利益を与えてくれます。

それは、現在地を知ることによって、「今を喜ぶ」ことが出来ます。
また、確かなゴールを知ることによって、「先を楽しむ」ことが出来ます。
さらに、来し方を振り返ると、お念仏のご縁に出遭うための旅であったと、「過去を懐かしむ」ことが出来るのです。

「今を喜び、先を楽しみ、過去を懐かしむ」・・・この三つの利益を同時に得るところに、念仏者の人生の旅があるのです。

阿弥陀さまの大悲心に出遭わなければ味わえない深い深い喜びの人生です。

[参考資料]
阿弥陀さまが慈悲の心（大悲心）を起こされたいわれを、『往生論註』（曇鸞大師）には次のように書かれています。
「実相を知るをもってのゆゑに、すなわち三界の衆生の虚妄の相を知るなり。衆生の虚妄を知れば、すなわち真実の慈悲を生ずるなり」
意訳すれば、
「阿弥陀さまは、何事もありのままに見抜く智慧を持っておられる。だから、私たちのウソ、偽りの姿を知ることが出来るのである。それを知ったら、『おお可哀想に。見捨ててはおけん。救わずにはおれない』という慈悲の心（大悲心）が起こるのである」ということです。
これは、真実の智慧（仏智）には必ず真実の慈悲が伴う（そういう働きがある）ということを言っています。

平成16年5月　　「光明寺だより34号」より